

宮川水系

五十鈴川流域の砂防

伊勢神宮宮域内の砂防

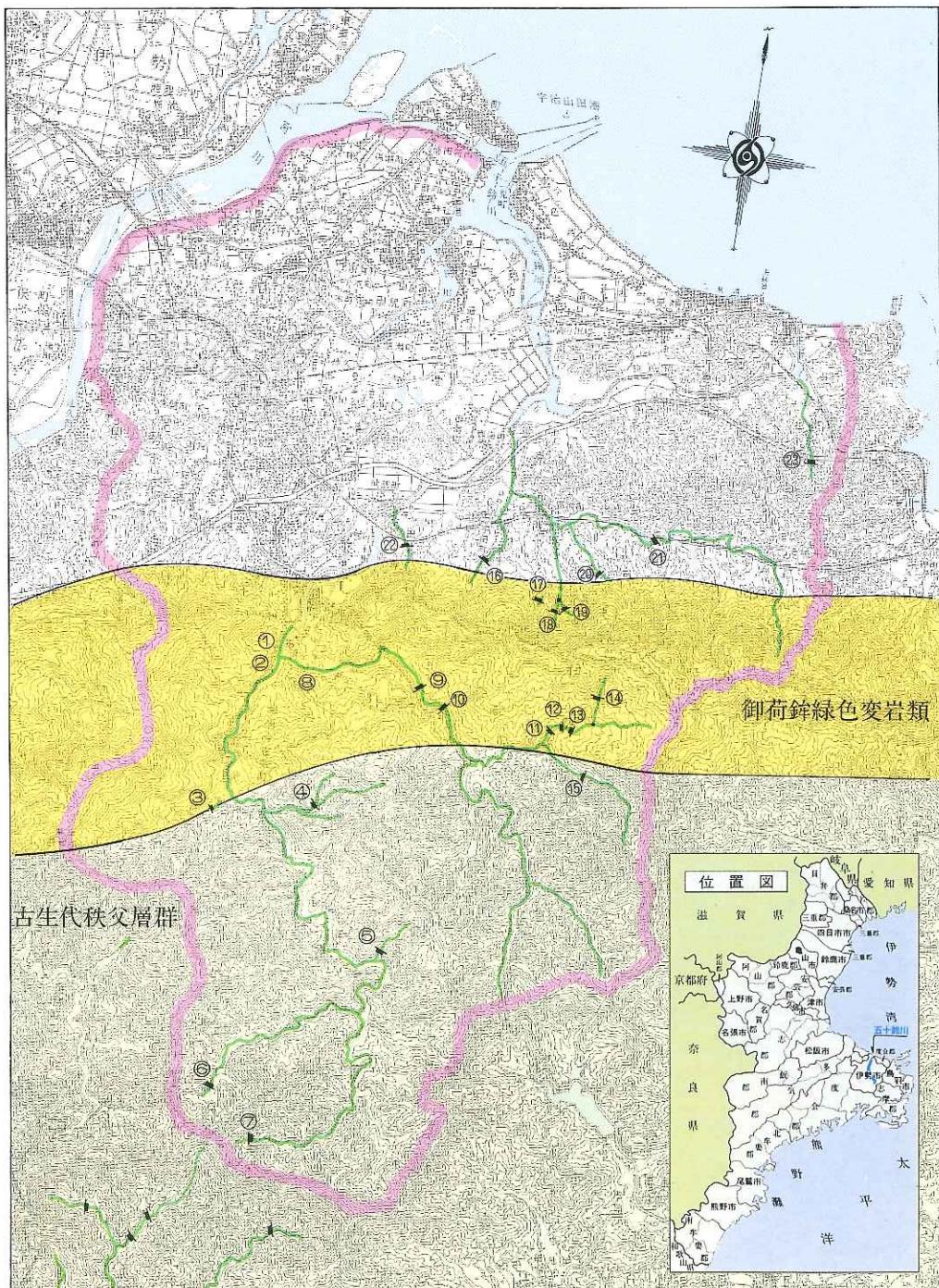


流域の概要

五十鈴川は、本県の中央部を貫流する1級河川宮川の水系に属しており、河口部で宮川と接し伊勢湾に流入する。流域面積は69.6km²あって、主な支川として下流より勢田川、朝熊川、島路川などがある。一方、流域内における砂防指定地の指定状況は、本川では宇治橋より上流、支川では朝熊川、島路川とこれらの支川の主な派川が線的に指定されている。

この流域の地質は主として古生層からなり、土壤はほとんど褐色森林土で鷺嶺と朝熊川を結ぶ断層線を境として、北部は古生層下部の御荷鉢層に属し、土層も浅く樹木の生育が悪く荒廃による土砂生産も多い。南部は秩父古生層となり、土壤が腐植物に富み土層深く樹木の生育に適しており、これら樹木が土砂生産の抑制効果を果してあり荒廃の度合は少ない。

流域図



流域内砂防設備一覧表

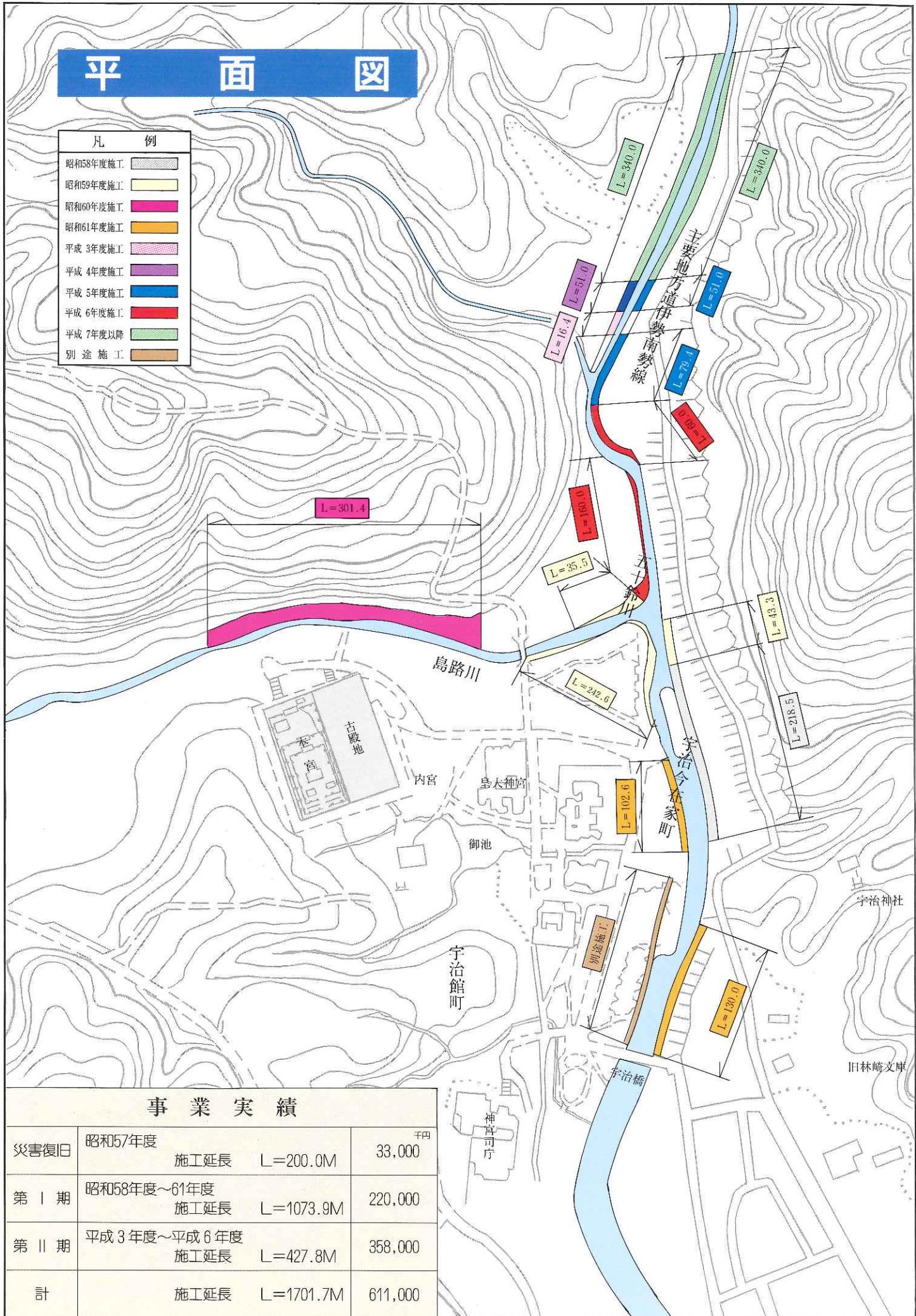
図面番号	幹川名	渓流名	設備名	工種	構造	堤高	堤長・護岸長	完成年度	備考
①	五十鈴川	五十鈴川		護岸工	自然石	— M	972.5M	S61	
②	ノ	ノ		流路工	ノ	—	427.8	H6(予定)	
③	ノ	倉口川	倉口ダム	ダム工	コンクリート	14.5	55.0	H2	
④	ノ	灰の木原谷	灰の木原ダム	ノ	ノ	9.0	44.0	S42	
⑤	ノ	小滝谷	小滝ダム	ノ	ノ	11.0	53.3	S44	
⑥	ノ	田代谷	田代ダム	ノ	ノ	7.5	56.0	S40	
⑦	ノ	大床谷	大床ダム	ノ	ノ	9.0	47.8	S43	
⑧	島路川	島路川		護岸工	自然石	—	301.4	S60	
⑨	ノ	ノ	島路第1ダム	ダム工	練石積	7.5	50.0	S14	
⑩	ノ	ノ	ノ第2ダム	ノ	ノ	8.5	44.5	S14	
⑪	ノ	彦谷	彦谷第3ダム	ノ	ノ	8.5	33.5	S18頃	
⑫	ノ	ノ	ノ第2ダム	ノ	ノ	5.0	37.0	S18頃	
⑬	ノ	ノ	ノ第1ダム	ノ	ノ	4.5	35.0	S18頃	
⑭	ノ	井戸谷	井戸ダム	ノ	コンクリート	10.0	40.0	S46	
⑮	ノ	ヨナキ谷	ヨナキダム	ノ	ノ	12.5	52.0	S47	
⑯	朝熊川	一宇田川	一宇田ダム	ノ	ノ	14.0	82.0	S59	
⑰	ノ	雲出川	雲出ダム	ノ	ノ	12.0	64.0	S63	
⑱	ノ	大谷川	大谷第一ダム	ノ	ノ	10.0	66.0	S52	
⑲	ノ	ノ	ノ第2ダム	ノ	ノ	13.0	68.0	S54	
⑳	ノ	ケーブル川	ケーブルダム	ノ	ノ	10.5	93.0	S63	
㉑	ノ	朝熊川	朝熊ダム	ノ	ノ	8.5	58.0	S26	
㉒	五十鈴川	矢田川	矢田ダム	ノ	ノ	12.0	66.8	S56	
㉓	五十鈴川派川	松下川	松下ダム	ノ	ノ	8.5	29.0	S47	

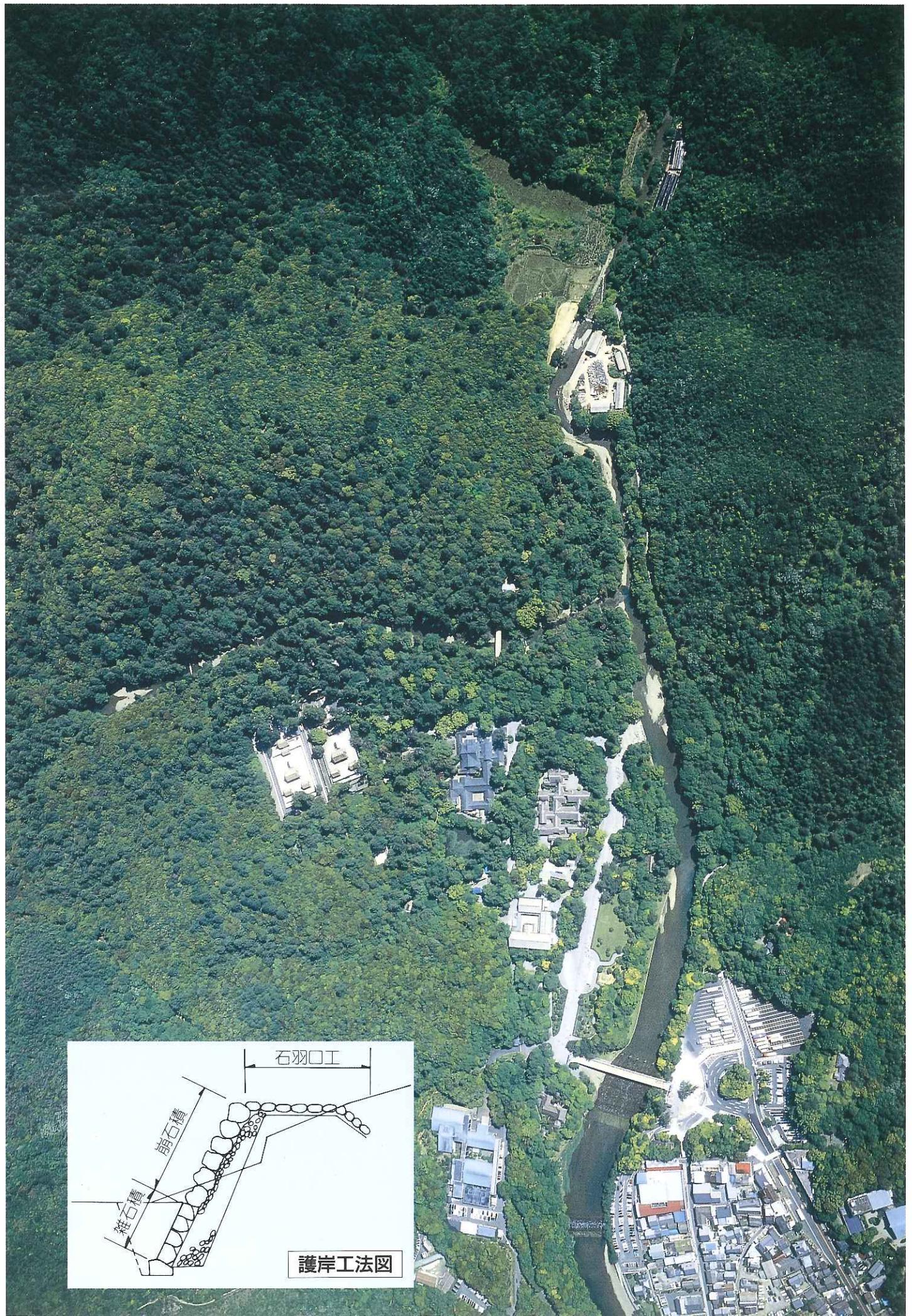
主な砂防設備



平面図

凡 例
昭和58年度施工
昭和59年度施工
昭和60年度施工
昭和61年度施工
平成 3年度施工
平成 4年度施工
平成 5年度施工
平成 6年度施工
平成 7年度以降
別途施工





護岸工法図

景観に配慮した護岸工

五十鈴川流域は、ほぼ全域が神宮宮域林となっている。そのため、広い地域にわたって人為が入らないうつ蒼とした天然林が保全されすぐれた景観を呈している。

これらの樹林は、土砂生産・流出の抑制効果を持っており、砂防の役割を果している。しかしながら、降雨時の出水による渓岸浸食は避けることは出来ず、護岸工による河道の固定を図ることとした。

この施工にあたっては、伊勢神宮宮域の美しい景観との調和を図るため、当渓流に多くみられる『青石』を用い、かつ『大和くずし』という崩積手法を用いる等周辺景観に配慮した工法を採用することとした。

このような配慮により、春・夏には木々の緑の中で、晚秋には紅葉の中で自然にとけ込んだ砂防設備として訪れる参拝客の心をなごませてくれる。

完成遠景（宇治橋上流）



施工前後（S57災）



(被災状況)

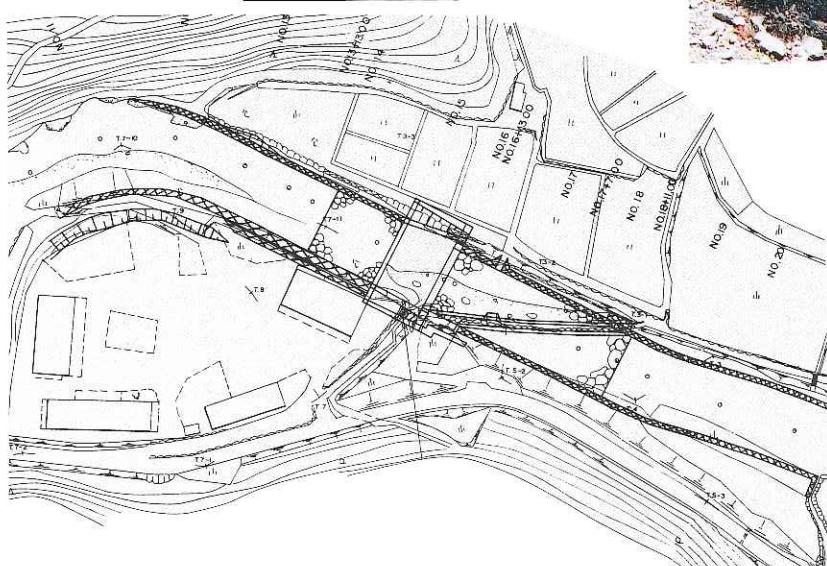
(復旧後)



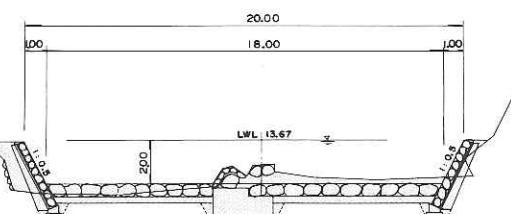
とび石と護岸工及び床固工



平面図



標準断面図



内宮御手洗場と護岸工及び床固工



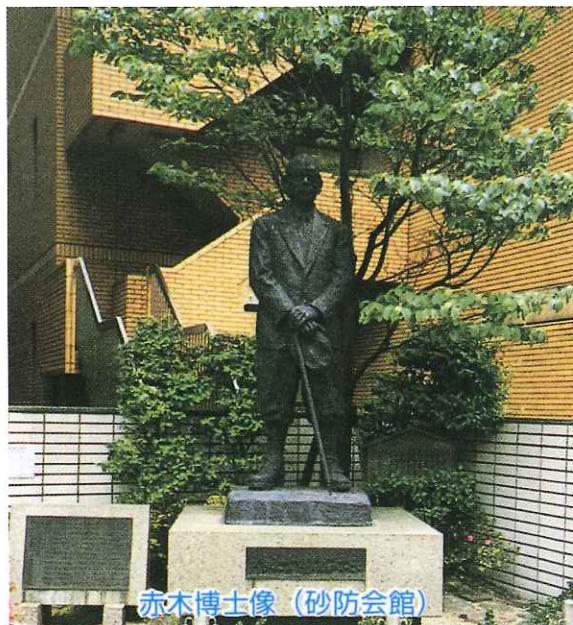
清流五十鈴川

その昔、倭姫命が衣の裾の汚れを洗ったという伝説から、御裳濯(みもすそ)川とも呼ばれています。五十鈴川の流れは、あはらい町の歴史の流れです。川とまちは、時を超えて人々の生活と旅人をみつめています。

流域内の砂防のあゆみ

五十鈴川の下流域は、古くから門前町として栄えていたが、五十鈴川の度重なる氾濫により災害が絶えなかつた。これは流域内の林地が古来より神宮の神領として管理されてきたものの、足利時代の末期より地元伊勢地方の薪炭林的な性格を持つようになり、乱伐が繰り返されてきたことに主な原因があつたものと推察される。

このため、大正7年9月の台風による大災害を契機として、流域の一貫した管理の必要性が唱えられ、大正11年に風致景観の保持と水源涵養を目的として宇治橋より上流域については帝室林



赤木博士像（砂防会館）

による効果と、神宮による計画的な宮域林の管理・経営のおかげで崩壊等による大きな土砂生産は見られなかつた。しかしながら、連続雨量712.4mm（高麗広）という大降雨による出水で溪岸浸食されられず、神域内の護岸が著しく被災したため護岸工による復旧を行つた。この復旧工事に当つては、自然石を用い周辺の景観との調和を図つている。

野管理局より神宮司庁へ移管されることになり、内務省が管理することになった。翌大正12年には、「神宮神地保護調査委員会」が設立され、以後同委員会が当流域の保全に側面的に大きな役割を果してきている。このような動きをうけて同12年には原田内務技監が当地を視察し、流域内に堰堤築造の必要性と河道の測量を指示しており、その後神宮（内務省）において種々の治水工事が実施されることとなった。これらの施設は、今日もなお流域内に見ることが出来その役割を果している。

今日でいう高堰堤などの本格的な砂防設備が設置されるようになったのは、昭和10年代になってからであり、赤木博士の御甚力に負うところが大きかった。島路川とその支川の彦谷についても同博士が直接指示されたということである。

戦後になってからは、昭和34年の伊勢湾台風により同流域は荒廃の度を増すこととなつた。そのため、以後昭和40年代迄に7基の砂防ダムが設置されている。近くは昭和57年の台風10号による洪水災害があげられるが、この時には既設の砂防設備には宮域林の管理・経営のおかげで崩壊等による大きな土砂生産は

原田内務技官の意見書（大正12年）

揮故強ナシ該玉ノ辛銭川被察ハ高木廿日沐宮司農林
移課長、第四ノ事ト申、詳細相應ナシ。付單是別紙也了
差出有止矣考トニ有公私ハ幸甚此事一ノ不私也。相見
太重系立リテ
山内浦社石泉殿
五百四十銓川改良工圖示卑見
五百四十銓川改良ノ目的、非常治水、會レ高水、官域ニ氾濫セル程度ヲ
減少セシムト常水、豐富ナシレルトノ事ニツノ目的ニ達スルニハ本
流及支川ノ上流ニ適宜堰堤ヲ設ケルヲシテ最良策ト思考ス。該堰
唯ニ水利、閑居ニ止マラス永遠ニ林地保護ノ目的ニニ適フ。シ作併多大
ナニ工費多ニ要ス。又一氣呵成、施ス。必至ノ視サレハ十ド調査ヲ起
シ徐々實行、築ヲ建ルモ支障ナシレ
高木面内懸トニ宮城沿岸半淡陽對岸ニ高木寄洲、存在セリ。モ
アリテ濱水期ニ於ケル河水ノ缺乏、訴フル。至シトニテ是カ故海ノ方法
トニシテ附近ノ河道ヲ適宜、浚渫レ半淡陽前面ニ十分ナル水量ヲ導クレ
アリ文末第記、寄洲ノ非常治水ノ際、流下ニ事。沈澱セシカ故ニ一度浚
疏セリニ三十年間、断トメ不復ア訴ス。テノ後レ浚渫、已吸深溝等リテ
シ水利ヲ講究シ遂ニ定セケリ。又本件ノ研究ニ支川、宮城由本流
ハ支川今流委半數町上リ下流アリ。水堰ニ至リ、面測量ニシテ所
置ニ横断測量を施ス。シ（若シ三重縣、平而圓存立ミテ横断ミテ可シ）
本測量ハ三重縣又林務課ノ費用ヲ以テ實行、上製圓柱皆運ミ至。
シル最ニ好也。是レ不取トシ、源渠説在所ナシ。是、場合全形
ヲハ木本局第ニ技術課長、移牒シ課員ヲシテ源渠ヲ作製セシマヌ



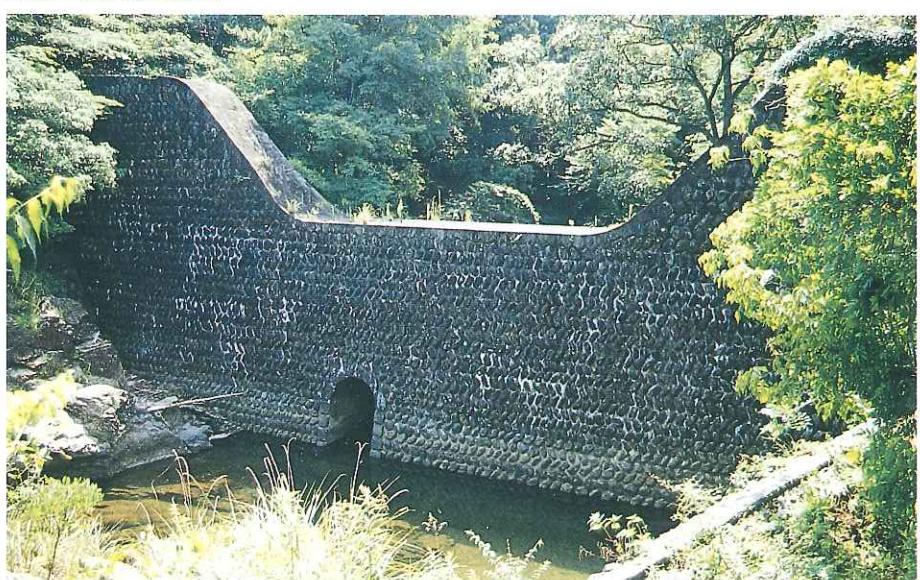
島路第2ダム



彦谷第2ダム



彦谷第3ダム



島路第1ダム

伊勢の神宮

古くから「神宮」といえば伊勢の神宮をさします。それは最も尊いお宮だからです。
神宮は皇大神宮（内宮）と豊受大神宮（外宮）の両正宮を中心として、14所の別宮、109所の摂社・末社所管社からなりたっています。

皇大神宮（内宮）

皇大神宮には日本国民の大御親神
とあがめまつる皇祖天照大御神をおまつり申し上げます。

天照大御神は歴代の天皇がおそば近くでおまつりされたが、第10代の崇神天皇の御代にはじめて皇居をあでましになり、大和の笠縫邑におまつりされました。

ついで各地をご巡幸ののち、第11代垂仁天皇の26年（約2,000年前）大御神の御心にかなつた大宮どころとして現在の地にあしづまりになりました。



皇大神宮

豊受大神社（外宮）

豊受大神社には豊受大御神をおまつり申し上げます。第21代雄略天皇の22年（西暦5世紀）に天照大御神のご神慮によって丹波の国（今の京都府北部）から、この度会の山田原におむかえしたと言い伝えられています。

豊受大神社は天照大御神のあめしあがりになる大御饌（食物）の守護神であり私たちの生活をささえむ一切の産業をおまもりくださる神様です。

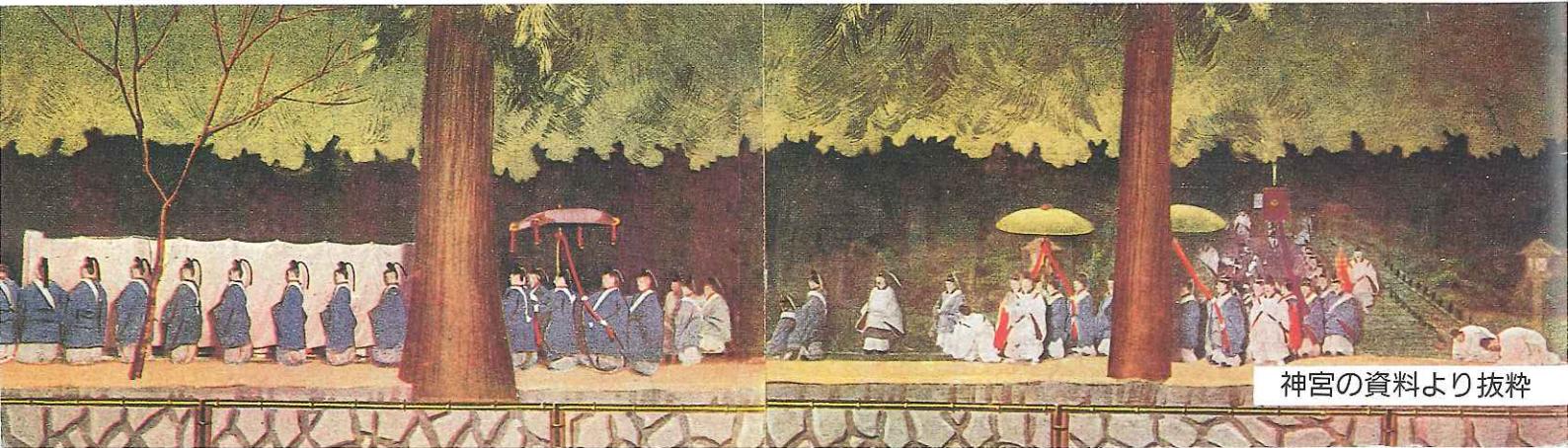


豊受大神宮

式年遷宮

神宮には内宮・外宮とも、それぞれ東と西に同じ広さの敷地があり、式年として定められた20年ごとに同じ形の社殿を新しく造り替えます。また神々の御装束・神宝を新しくして、大御神に新殿へお遷りいただく日本で最大最高のお祭りが式年遷宮です。

これは今から約1,300年前、天武天皇があ定めになり、次の持統天皇の4年（690）に第1回目が行われました。長い歴史の間には戦国時代に一時中断し、やむなく仮遷宮をしたことや、先の戦争で4年間の延期はあつたものの、これまで20年ごとにくりかえし行われてきました。



神宮の資料より抜粋



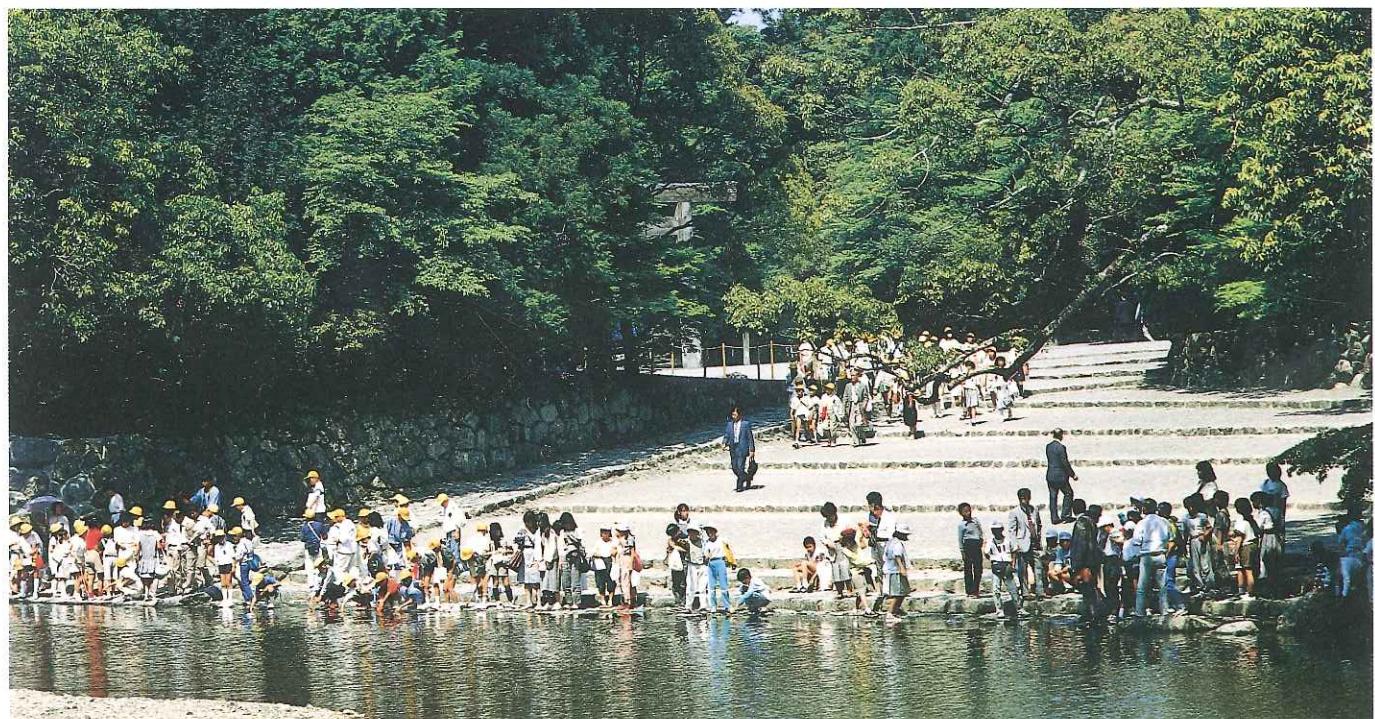
宇治橋



神宮杉



紅葉の神宮



御手洗場

自然にやさしい環境づくり



**三重県土木部砂防課
伊勢土木事務所**

〒514 津市広明町13
TEL (0592) 24-2697
〒516 三重県伊勢市勢田町622
TEL (0596) 27-5212